

# 1 沿革

筑西市は、平成17年3月28日に旧下館市、旧真壁郡の関城町、明野町、協和町の1市3町が合併して誕生しました。万葉集にも歌われている筑波山の西側に位置し、風光明媚で豊かな自然環境に抱かれた人口11万人余の茨城県西部の中核都市です。

旧下館市は、古くは桓武天皇の元応元年(781年)藤原魚名が奥州に備え三館(上館、中館、下館)を築いたといわれ、天慶3年(940年)の平将門の乱のとき下野より起った藤原秀郷(藤原魚名の子孫)が下館に拠り将門追討の軍を進めたという。天永2年(1111年)に藤原実宗が常陸介となり伊佐荘中村(今の中館)に住み伊佐氏を名のり、子孫の朝宗が伊達氏の祖となった。南北朝時代の興国4年(1343年)一族の伊達行朝は南朝に組し足利尊氏と戦い落城し以来廃城となった。文明10年(1478年)に陸奥岩城水谷(福島県いわき市)から出た水谷勝氏が結城氏広(結城14代)より独立下館城主となり、寛永16年(1639年)8代勝隆が備中成羽(現岡山県高梁市)へ移封されるまで160年間戦国大名として領内経営にあたり下館の今日の基礎をつくった。水谷氏移封後は水戸徳川頼房の子、松平頼重が城主となったが、僅か2年で讃岐高松(香川県高松市)に移封となり、以後は代官政治や増山氏、黒田氏の城主の後をうけて、享保17年(1732年)石川総茂が伊勢国神戸(三重県鈴鹿市)より入封2万石の城主となり、137年を経て9代総管の時に明治維新となった。明治17年の自由民権運動には自由党員の決起があり、加波山事件の発端の地でもある。一方文化面では俳人と謝蕪村が青年時代約10年にわたりこの地方を中心に修行している。又陶芸界の巨匠板谷波山、洋画家の森田茂も下館に生まれている。明治以後県西地方の商工業の中心地として発展し、昭和29年3月15日隣接8ヶ村を合併、市制施行し「下館市」が誕生した。

旧関城町は、鬼怒川と小貝川に挟まれた地形で古くは沿岸の文化が特に開けており、現在県の文化財指定となっている船玉古墳にその面影をみることができる。一方、小貝川の沿岸地方は、黒子高台の下から鳥羽の淡海が広がり、沿岸に住家が点在し、淡海から食糧を得て生活を営んでいたと思われる。中世には、関館に関城が築城され、南北朝時代、北朝方の「足利尊氏」の軍勢と南朝方にくみした関城主「関宗祐」が激しく戦い、その間関城に赴いた南朝の重臣「北畠親房」が関城において「神皇正統記」を完成したと伝えられている。江戸時代は、多くが旗本の領地となり、天領・寺領・各藩領と入り乱れてその支配は複雑化しており、主な産業は農業であったが、鬼怒川沿岸地帯は養蚕が盛んで絹織物の生産も盛んに行われていた。しかし、村と村の貧富差が甚だしく疲弊を建て直すために「二宮尊徳」が花田に来村し、荒地起耕や新田開発を重点に3年間にわたり仕法を行っており、この頃に特産となった梨の栽培も始め

られた。明治に至り、旧来の村が合併して関本町、河内村、黒子村の新しい町村が誕生した。養蚕業は絹織物と共に盛んになり、梨の栽培は漸次隆盛の一途を辿り明治37年には当時画期的な共同販売組織がつけられた。その後、昭和31年8月1日に関本町、河内村、黒子村の1町2村の合併により、関城町が誕生した。

旧明野町は、倉持遺跡などから貝塚や土器が発見されたように縄文時代より早くから開け、古代は狩や鳥羽の淡海での漁業が生活の中心であった。大和国家が成立した4世紀頃は新治国に属し、大化の改新以後は常陸国新治郡、白壁郡を経て延暦年間に真壁郡と改称された。平安時代は平将門にかかわる伝承が多く、平国香の墓が東石田にあり、承平の乱や天慶の乱の中心地であった。また、当時は石田荘、村田荘、大村荘、田中荘といった荘園が発達していた。南北朝時代は、小田、関、下妻、結城氏などの支配下におかれており、海老ヶ島城は海老原右近将監輝朝によって築かれ、佐竹氏の援助を受けた宍戸義長が文禄4年(1561年)に入城してこの地域を整備した。江戸時代に入るとこの地域は天領や旗本領になり、代官や知行によって治められ、支配者が異なる相給が殆どあった中でも名主、組頭、組が組織され、農民同志が援助しあう自治制度が確立していた。1868年の大政奉還後、常陸県、若森県を経て茨城県に編入され、明治時代中期に町村制が施行されると大村、上野村、鳥羽村、村田村、長譚村といった現在の基盤ができ上がり、昭和29年にこの5か村が合併して明野町が誕生した。

旧協和町における歴史はおよそ1万年前の無土器時代にまで遡り、縄文、弥生古墳時代へと北部の小栗台地を中心として人々の生活が営まれ、集落跡、古墳群等の数多くの遺跡が残されています。その後、崇天天皇の御代比奈良珠命が東国平定に派遣され、この子孫が新治の国づくりとして地域一帯を治めていた。律令時代には、出雲の臣の族が新治国の成朝に任命され、大化の改新の詔が下り律令国家が成立した。和銅年間に常陸国新治郡となり、奈良時代には町の東端古郡の丘に新治郡大領の郡衛(郡役所)や新治寺(廃寺跡)が建立され、政治・経済・文化の中心として栄えた。保延2年(1136年)には伊勢神宮の御厨領となり、小栗判官満重が地頭職となって治めていた。戦国時代になると伊勢御厨の機能は消滅し、太閤検地により新治郡は消滅した。江戸時代は支配関係が複雑化し、大名や旗本の知行領として明治に至った。明治22年の市町村制の施行により、古里村、新治村、小栗村が誕生した。また、水戸線が開通し、明治29年に新治駅が建設され、町発展の重要な交通機関となった。昭和29年12月には町村合併促進法に基づき、3村が合併して協和村が誕生し、さらに昭和39年12月1日に町制を施行し、協和町となった。